待　陵　通　信　第28号

平成25年11月9日
（敬称略）

①**訃報**　平成25年10月7日以降に判明した方々　謹んでご冥福をお祈り致します。

17理乙	松若　昭二	平成25年9月14日	堺市西区
19理甲３	近田　　孜	平成25年9月25日	長岡京市

②住居変更
18文１　森井 英雄
〒６６０－０８６１　尼崎市御園町27-3　グッドタイムリビング尼崎駅前

③午餐会・懇話会
＊第506回午餐会　25年10月7日（月）正午～14時30分
於　中央電気倶楽部　317号室
講師　栗原 佐智子氏　大阪大学21世紀懐徳堂招聘研究員　大阪大学出版会職員
テーマ　「待兼山の植物たち　大阪大学キャンパスの植生の変遷」
出席者　３理甲遺津賀美智子・15理甲三木卓一・16理２山村好弘・17理甲１栗野正之
17理甲2松山敏彦・理乙喜多舒彦・18理甲4髙岸宗吾・理乙橋田進
19理甲３三浦昭二郎・20文乙池口金太郎・城野伊一郎・理２鶴岡誠
21文甲1頴川勉二・真銅孝三・21理1山田茂樹・理2武田晃世・前田泰敬
21理3後藤業明・理4川島康生・中原充雄・22文甲2井本憲伺・理2松浦實
22理２三島佑一・理３井上達明・理4大路清嗣　　事務局　阪田訓子　　以上24名

④各地寮歌祭
＊第３回全国旧制高校寮歌祭　25年10月14日（月・祝）
於　新宿セントラルパークビル
旧制高校35校、大学予科3校計38校のみによる寮歌祭で、参加者300余名、浪高から10名が参加、関東地区寮歌祭における、浪高の存在感を示した。
参加舎　16理乙岸保芳郎・19文甲２高間宏治・理甲２武田聰光
19理甲4藤田宏・同夫人・21文甲1徳久俊彦・文甲2田中昂
22文甲1近久達雄・前田昭・文乙亀田一彦

⑤支部だより
＊関東浪高会　**④各地寮歌祭**記事参照
＊阪南支部　第350回二木会　25年10月10日（木）13時～　　於　堺東「Continuer」
出席者　18理甲4髙岸宗吾・20理1大塚穎三・理2鶴岡誠・21理2武田晃世
フランス料理の食事、歓談後「本店 嶋川」に移動し、デザートを味わった後散会

⑥同期同級交歓
＊21回理３クラス会（昨年から春秋２回開催）　25年10月６日（日）13～15時
於　有馬（梅田・阪急ターミナルビル 17Ｆ）
出席者　石川俊彦・後藤業明・志水洋二・下里常弘・竹原登・玉井恭二・中島礼士
中西克己　　以上　８名
＊尋常科「泉石会」　25年度例会　25年10月17日（木）11時30分～15時30分
於　大阪マルビル　大阪第一ホテル　６Ｆ
一次会　マーキス（Ⅱ）　二次会　ランスロット（Ⅰ）　喫茶
出席者　植田秀作・喜多舒彦・小山隆三・佐伯秀穂・斎藤顕・芝孝夫 夫妻
島雅昭 夫妻・寺田信・畑捨三 夫妻・中村清・西岡邦夫・松山敏彦
三浦昭二郎・三角荘一・水田紀久・村田吉弘・山本昭夫 夫妻・渡会信夫
故高橋充夫夫人　受付 阪田訓子（同窓会事務局）　　計　24名

「泉石会」は浪高尋常科に昭和14年入学と18年修了のどちらかの枠内に入る者の集まりで、20 数年間年1回開催で続けて来た。しかし寄る年波には勝てず、年々参加者が減少し、昨年は 14 名に留まった。今年も既に 4 名の方が鬼籍に入られたので、減ることは確実で、「泉石会」開催も今年で最後とすることにし、多くの人に参加をお願いした所、関東から芝夫妻、畑夫妻、中村君が馳せ着けてくれ、久し振りに賑やかに歓談することが出来た。
喜多舒彦君から「老人の生活いろいろ」と題して役立つスピーチがあり、次いで芝孝夫君の手品の披露があり、会場を大いに沸かせた。
最後に会の世話役の松山敏彦君に永年の努力に感謝の印として、小冊子に「萬謝と友誼」の題目で、当日参加の会員がそれぞれの思いと感謝の意を記して贈呈した。
宴会の時間は一次会、二次会とたっぷりあり、話は延々と続き、結局今年で最後であった筈が、何時の間にか幹事の負担を減らし、簡素化（年会費なし、近況報告廃止、写真なし、欠席者への報告なし）費用も半分位に押さえて場所も選ばず、少人数でもよいから続けることになり、来年は５月の第３金曜日に開催決定。本当に集まるのが好きな集団である。

蓋棺録

ガイカンロク
Obituaries

文芸春秋誌　25年11月号から転載

民俗学者・谷川健一（たにがわけんいち）は、日本中を旅して歩き、庶民文化の深層にせまった。

二〇〇七（平成19）年、文化功労者に選ばれる。多くの出版企画や著作を通じて、独自の民俗学を樹立したというのが選考理由だった。

一九二一（大正10）年、熊本県の水俣に生まれる。父親は開業医。弟は詩人の谷川雁（本名・巌）。幼少年期から結核のため病気がちで、本を読み、トランプの一人遊びで過ごすことが多かった。

旧制熊本中学をへて旧制大阪府立浪速高校に入学。この間も結核が再発、東京大学文学部に入ったときには二年遅れていた。卒業後は平凡社に入り、『児童百科事典』編集部に配属され、仕事を通じて柳田國男や宮本常一と出会う。

民俗学者たちとの交流から、庶民の生活を集成する『風土記日本』（全七巻）を企画して成功させ、さらに、社会の底辺に目を向けた『日本残酷物語』（全七巻）がベストセラーとなる。「残酷物語」は流行語にもなった。日本初の大判グラフ雑誌『太陽』の初代編集長も務める。

このころ初めて書いた小説『最後の撫夷党』が直木賞候補となるが、結核がぶり返して作家への道は断念。体力の回復を待って、日本の各地を歩き回った。「こんどこそ、息の続くかぎり、裸足で走ってやる」と思ったという。

何度も沖縄を訪れ、七〇（昭和45）年に『沖縄　辺境の時間と空間』を上梓。七九年には岐阜県南宮大社の「ふいご祭」に着想を得た『青銅の神の足跡』を刊行。言葉の呪力を考察した『南島文学発生論』は、九二年に芸術選奨文部大臣賞を受賞した。

若い人にも独学を勧めた。「独創的な研究は、自分で学び、自分で考えることからしか生まれません」。（8月24日没、不明、92歳）

2013年（平成25年）10月7日（月）　毎日新聞

悼む

手弁当で闘い続け

藤田（ふじた）　一良（かずよし）さん　弁護士・元伊方原発訴訟原告側弁護団長

直腸がんのため　8月17日死去・84歳

「されど真実は執拗（しつよう）なり」。1973年に四国電力伊方原発（愛媛県）の原子炉設置許可処分の取り消しを求めたわが国初の反原発訴訟で、住民側原告の弁護団長を務めた。92年上告が最高裁によって退けられ、敗訴が確定した際、周辺に漏らしたのが、この言葉だ。

上告理由補充書で電源喪失による炉心溶融の可能性に触れた。「原発事故の被害は一国だけでなく、全地球的規模で広がる」と2011年3月の福島第1原発事故を予言するように指摘していたのだ。

10年前、直腸がんに侵され、弁護士事務所を閉じた。しかし、手術後も3～4カ月に1度ほど「みんなで集まろう」と親しい者同士での談論風発を楽しみにし、いつでも、どんな話題でも中心にいた。

伊方訴訟もよく話題になった。手弁当で闘い抜いた裁判で、「科学論争を含め、内容的には私たちの勝ち」と自信に満ちていた。「福島第1原発事故で正しさが実証されましたね」と水を向けると「こんな悲惨な形でしか証明されなかったことが残念でたまらない」と悲しそうに答えた。

被告の青年が無実を訴えた狭山事件での弁護などはラジカルな正義派弁護士の面目躍如だったが、それだけではなかった。人があまり読まない哲学書や歴史書を深く読み込み、世間の常識を皮肉るのを無上の楽しみにしていた。「藤田先生の裁判書類は一種の文学だ」と共闘した学者らが語るのを聞いたことがあるが、その通りだろう。クラシック音楽にも素養があり、批評は前衛作曲家のジョン・ケージにも及んだ。

藤田さんの遺志もあり、伊方をはじめとする裁判の記録の他、文学、音楽、哲学に触れた随筆集も出版されるという。

（元毎日新聞記者・滝沢岩雄）